

なぜ日本人テニス競技者は世界のトッププロになれないのか

Causes of why Japanese tennis players are difficult to become a top player in the world

1K09B210

指導教員 主査 木村和彦先生

山崎 恵子

副査 間野義之先生

【目的】

テニスを行う人口は他の競技と比べて、テニス人口は協議人口 500 万人、人口推移も 10%で安定しているため、少なくともにも関わらず、なぜトッププロになれる人が少ないのだろうか。ここでいうトッププロというのはATPランキング 100 位以内に入っているひとのことをいう。ITF 2009 年のデータによると男子テニス選手におけるピーク年齢は 23 ± 2 歳であるとされている。その時期は大学に通っている時期であるため、大学における日本人選手と米国人選手の環境の差なども影響していると考えられる。原因として、3 点あげることができる。1 点目としては、米国の方がテニスの質、環境においてレベルが高い点をあげることができる。2 点目としは、日本においてはトップ選手になるにあたって有効な手段の 1 つとされる ITF ジュニアにおいてトップ 10 に入る機会が少ないという点をあげることができる。3 点目としては、3 点目としてあげることができるのが日本における国際大会の圧倒的な少なさをあげることができる。自身のランキングを上げるために有効な、日本とアメリカにおけるフューチャーズとチャレンジャーの大会数を比べてみると。日本の試合数のほうが少ないことがわかる。

一方でテニス選手から言われることは、日本人選手の米国人に比べ、メンタリティーの違いである。沢松は、テニスの科学の中のインタビューにおいて日本人のハングリー精神に言及している。では、このようなテニスの日本人選手に言われる自分に対する甘さ、ハングリー精神の欠如というものは本当にあるのか、その原因はどこにあるのか。日本と米国を比べてどのようなメンタリティーの差があるのか、その差はどこから生まれるのかということを文化的な違いという側面からも検討する。

そして、その文化的差により、競技者にも心理的な影響がうまれるのか、テニス選手にもあてはまるのかどうか検討し、日本人テニス選手が世界のトッププロになれない原因の一因となっていることを明らかにする。

【方法】

以下の順序で様々な文献を比較し検討する。

- 1、日本と米国におけるメンタリティーの差はあるのかどうか
- 2、そのメンタリティーの違いはどこから生まれるのか（比較文化心理学の有効性）
- 3、日本と米国のどのような文化差からうまれるメンタリティー差なのか

4、自我状態は心理的な影響を選手に与えるのか

5. テニス競技者選手にも当てはまるのか

【結果】

メンタリティーの差として日本人選手は米国人選手と比較して、自我志向性が高く、課題志向性が低い、個人志向性が高く、社会志向性が低いという違いが明らかとなった。またさまざまな文献からわかるように、比較文化心理学の見地から、メンタリティーの差は、文化的な差から生まれることがあきらかとなった。日本と米国において、ルースベネディクトは、「菊と花」において、米国人と日本人の生き方の違いを自由と拘束を指標としてU字型の生活曲線で表し、その曲線が両国ではあべこべになっていることを述べている。また、村社会、キリスト教、民主主義導入の時期の違い等の文化的差から交流分析の自我状態において、差がみられることもあきらかになった。そしてその自我状態、というものは心理的な影響を競技者にも充分に与えていることがわかり、そのことはテニス選手にも当てはまっていることが明らかとなった。

【考察】

文化的な差からうまれるメンタリティーの差は日本人テニス選手が世界のトッププロになれない原因の一因となっていることが明らかとなった。よって、今後の日本人のメンタリティーにおけるコーチングの際にはアメリカのメンタルトレーニング方法をそのまま導入するだけでなく、日本人にあった方法をとることが、日本人テニス選手が世界で活躍するには必要なのではないかと考える。

【主な引用・参考文献】

磯貝 浩久;スポーツ心理学における異文化間研究の動向と課題、1996

中澤 史;アスリートの自我状態と心理社会的スキルに関する研究、2009

日本人サッカー選手のメンタリティー

<http://soccermate.jp/kenkyu/kenkyu02/mentality02.pdf>